

車神社の由来について

1 謎の神社名

大正15年発行の八名郡誌を調べると、<資料1>のように記されていた。車神社は天正時代からの社名で、変遷がないのは珍しいというが、なぜ「車」なのかは分からない。

<資料1> 車神社 (八名郡誌, 車神社誌より)

全国的にも珍しい神社名で、祭神は日本武尊^{やまとたけるのみこと}。創建は不明だが、天正11年(1583)の棟札がある。それ以前のものはないが、延宝8年(1680)の鏡、永禄13年(1570)奉納^{わにぐち}の鰐口(径20cm)が残されている。年代不明だが、獅子の頭^{かしら}(縦横約10cmで、張子の虎のようなもの)もある。

社名の変遷はよくあるが、本社は車大明神で通しており、大変珍しい。慶長9年(1604)の検地帳に五石一車大明神領とある。また元禄8年(1695)の検地帳(字堀切の新田)には、田8畝^せ10歩^ぶ、大明神領としてある。これは領主の安部撰津守^{あんべせんづのかみ}の陣屋所在地の氏神のため、特に寄進されたものと思われる。

境内社には天王八王子社、若宮社、御鋏社^{おくわ}、今宮社、巖島社、奥の院に秋葉社がある。

神社本庁へ問い合わせると、車神社は全国に2社しかない大変珍しい社名と分かった。もう1社は、豊橋市植田の車神社だという。社名については由来が分からないことが多いそうで、地元で分からないものは調べようがないとの回答だった。

2 由来の追求

(1) 有識者から

まず宮司に尋ねた。由来は分からないと言われたが、昭和58年(1983)発行の400年記念祭でまとめられた車神社誌を貸して下さった。しかし、由来に関することは全く記述されていない。宮司は、「車神社は、古くは建立や増築の際には富賀寺の住職が祈願し、棟札にも名が残されているので、富賀寺で何か分かるかもしれない。」と教えてくれた。

さっそく富賀寺を訪れたが、車神社に関する記録は一切残されていないとのことだった。また、地元の郷土研究家、神社仏閣に詳しい方、教育委員会文化財担当者にも尋ねてみた。それぞれに調べてくださったが、有力な手がかりはつかめなかった。やはり、記録がないようだ。

(2) 植田の車神社との関連

全国に2社しかないもう一つの豊橋市植田の車神社に手がかりがあるかもしれないと考え、豊橋中央図書館の車神社について書かれた文献をあたった。

- ・東三河ところどころ S13年発行
- ・豊橋神社誌 S44年発行
- ・校区のあゆみ 植田 H18年発行
- ・豊橋の民話 片身のスズキ H18年発行
- ・車神社 会所当番8組 H14年発行 (後に安形宮司提供)

神社の由来にかかわる伝説が残されてはいたが、関連は見つからなかった。

(3) 車神社の古文書

秋の例祭準備の折に社務所にある古文書を確認した。残念ながら出納簿がほとんどで、車神社の由来に関する記録はなかった。ただ、400年記念に発行された「車神社誌」の基になったという「車神社記録」を見ることができた。

車神社記録は、昭和 25 年（1950）に当時の氏子総代がまとめたものである。やはり、由来については由緒不詳となっていた。書かれているおもな内容は次の通りである。

○緒言 天正 11 年から昭和 25 年に至る経緯

従来、神社は僧侶の監督に属していたが、維新後の神仏分離令により神祇事務局の管理下となり、神仏混合の廃止、境内地の国有化等があったこと。

農地改革により、車神社の 1 町歩あまりの耕地を解放し、年貢米の収入を失ったこと。

○建 物

本社造立：寛永 8 年（1631） 拝殿造立：慶安元年（1648）

舞台再建：文久 3 年（1863） 社務所新築；昭和 6 年（1931）

○祭 神 日本武尊 由緒不詳

鎮座 天正 11 年（1583）の頃 創立の年月日不詳

- 境内神社 5 社
- ・天王八王子社 祭神 8 柱
 - ・若宮神社 祭神不詳
 - ・御鋏神社 祭神 天照大神
 - ・今宮神社 祭神 清和天皇
 - ・巖島神社 祭神 市杵島姫命

（4）富岡資料庫の古文書

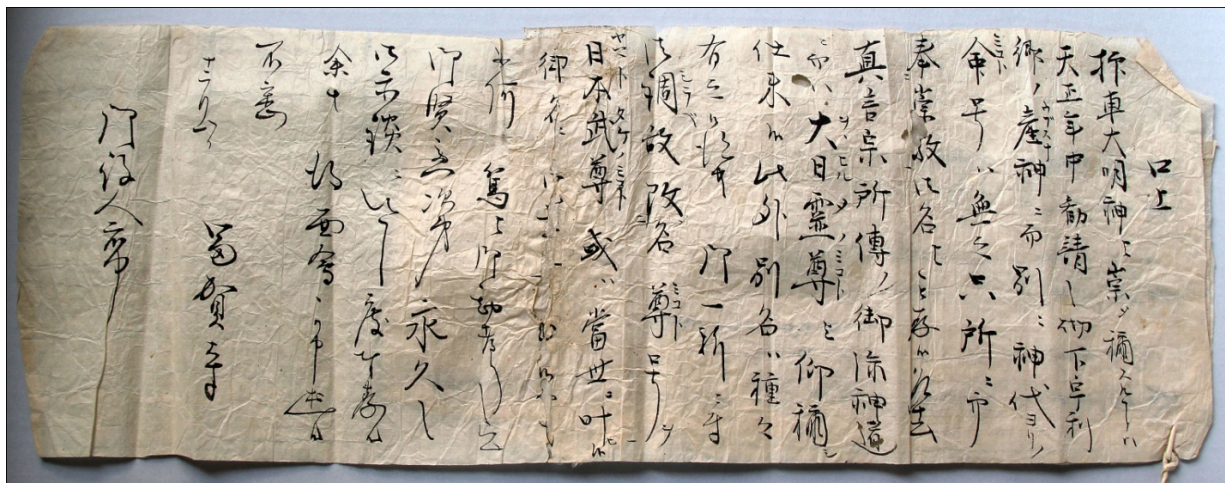
富岡資料庫には、富岡区に関する古文書が保管されている。目録を確認すると、車神社の祭神由来の文書があることが分かった。この目録は、故本多美佐夫氏を中心とする 11 名の調査委員がおよそ 2 年、60 回に及ぶ調査をし、昭和 57 年（1982）9 月にまとめたものである。江戸時代から昭和にかけての富岡の状況が項目別、年代別に整理されている。当時の政治、行政、人々の暮らし等を知る貴重な記録であり、先人の見識と努力に敬服するばかりである。

目的の文書をさがすのに時間を要したが、まもなく見つけ撮影することができた。それが、**<資料 2>**である。古文書の解読は、林正雄氏に依頼した。折り目で解読不能の箇所もあったが、**<資料 3>**のように分かりやすい文章にさせていただくことができた。

この口上は、12 月とだけ記されており、何年のものかは分からないが、明治元年（1868）に神仏分離令が出され、神祇官が置かれたことから、これ以後であることは間違いない。

肝心の車神社の由来は書かれていなかった。下宇利村（現在の富岡を含む）では、なぜ「車大明神」という名の神を守り神として崇めてきたのだろう。そもそも、車大明神と呼ばれるようになった背景は何なのか、ますます謎は深まる。

<資料 2>



<資料3>

口上

そもそも車大明神と崇め称することは天正年中に神様の分霊を請じてまつる際下宇利の産土神で神代よりの命号は無くただ祀っていた所で、崇敬して車大明神と言ってきたのだと思う

真言宗で伝えてきた御流神道では大日靈尊と仰ぎ称えてきました

このほか別名はいろいろあり

明治の神仏分離令による調べにより大日靈尊という名は不可とのことで日本武尊と改名 時世に合った名前

(文字不明)

いろいろ考え時代にもあっていると思いますが、いかがか、よくお考えの上賢明なお考えによつては、永久の合意による解決にしたい、ここで述べた以外のことは、面会した上で申し述べたいと思う

思ったことを言い尽くせませんが

富賀寺
十二月

お役人衆中

ただ、祭神については明治までは「大日靈尊」であり、「日本武尊」は維新後に改名されたという事実は明らかになった。日本武尊が車に関わる糸口は見つからないが、大日靈尊について調べる必要があるようだ。

補足するが、明治元年には神仏分離令に続いて太政官の社格制に関する通達があった。上位から官社、府県社、郷社、村社、無格社とされ、八名村の郷社は賀茂神社と定められ、車神社は村社とされた。村社は村で1社とされたために、竈、日吉、愛宕の3社は無格社とされた。

(明治8年に下宇利村と半原村が合併して富岡村となっている)

3 車神社の由来を推理

(1) 神社名のつけ方

一般的には、神社名は次のようなつけ方があるという。

- ア 地名 最も一般的(庭野, 八名井神社)
- イ 祭神名を冠するもの(八幡神社)
- ウ 奉斎する氏族の名を冠するもの
- エ 祭神に関する語句を冠するもの
- オ 神社の種別を表すもの
- カ 祭神の座数(数)によるもの
- キ 由来が不詳のもの

明治になってから「～明神」や「～権現」などの社号は仏教的表現として、全て原則として「～神社」と称することになったとされている。車神社の神殿と末社の祠には計65枚の棟札が残されており、冊子に記されている棟札をみると、このことがはっきり確認できる。<資料4>

車神社となったのは明治になって神仏習合を排除する措置のためで、それまでは「車大明神宮」、「車大明

<資料4> 棟札の記録	
車大明神宮	天正11年(1583)
車大明神宮	寛永8年(1631)
車大明神	慶安元年(1648)
車大明神宮	元禄6年(1693)
車大明神社	寛保3年(1743)
車大明神社	安永9年(1780)
車大明神社	寛政9年(1797)
車大明神社	文化10年(1813)
車大明神社	安政4年(1857)
車大明神	文久3年(1863)
車神社	明治32年(1899)
車神社	明治42年(1909)
車神社	昭和3年(1928)

神社」と呼ばれていた。ちなみに大明神というのは、神号しんごうの一つで、明神をさらに尊んでいう称で、神名の下につけるとされている。ではなぜ、「車」なのかである。

車神社の場合、一般的な神社名のつけ方の地名、氏族、祭神名はこれにあたらない。富岡には車に関する地名や氏族はないし、牛車、荷車等の車に関わる伝承もない。地形的にも車状というには無理があるし、鎮守の森に古墳もない。神社の前を小川が流れているが、水車が設置されていたとも聞かないし、あったとも思われない。平坦な土地で水量がないため、雨が降らない限りは動力源になりそうもないからである。可能性があるとすれば、祭神に関する語句ぐらいしか考えられないが、まずは車そのものから探してみたい。

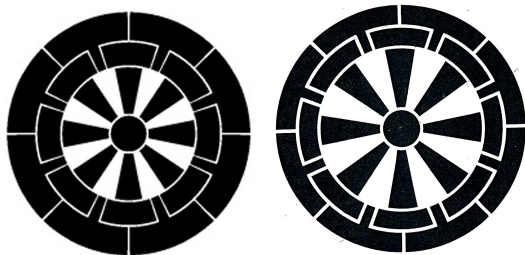
(2) 車紋は伊勢神宮から

富岡の車神社の社紋は、まさに車紋である。これを家紋から調べてみると、次のようなことが分かった。車は「クルクル回る車」が語源といわれる。日本で発見された最古の牛車は、奈良県桜井市で発見された木製車輪で、7世紀後半のものとされている。平安時代には、源氏車または御所車と呼ばれる貴族専用きつしやの牛車が、車の代名詞となった。

車紋は、この源氏車の車輪を形象化したもので、家紋として定着したのは鎌倉時代とされる。紋章の形は、円形と半円形があり、円形は骨の数によって区別する。伊勢神宮の神官・榊原氏が源氏車を家紋（榊原源氏車は骨が12本）としたことが基になっているようだ。榊原氏は佐藤氏の一族で、佐藤氏も車紋を用いており、伊勢信仰の広まりとともに佐藤氏が神官として諸国に分散し、車紋が広まったとされる。日本家紋大図鑑によると、源氏車は次第に紋様が増え、100種類以上のバリエーションがあるという。

このうち、源氏車の紋と車神社の社紋を比較してみる。〈資料5〉のとおりだが、これは全く同じとみてよいのではないか。回転部の厚みや軸の大きさは多少異なるが、デザインは全く変わらない。どうやら、車神社が源氏車の紋をとり入れたとってよさそうだ。

〈資料5〉



源氏車の紋

車神社の社紋

源氏車ができたのは平安時代で、家紋が定着したのが鎌倉時代とされるが、いつごろから車神社が社紋として使うようになったかは分からない。推測だが、車大明神宮にふさわしい社紋にするには、車紋でなければならない。車紋といえば伊勢の源氏車である。祭神の「大日靈尊」(天照大神)とも関わりのある伊勢神宮の神官を務める榊原氏(佐藤氏)一族の家紋を使わせてもらえるなら願ってもないことではなかったかと思われる。

(3) 太陽神(スーリヤ)の車輪から

車神社の明治以前の祭神、大日靈尊おおひるめのみことは天照大神の幼名あるいは別名とされている。「ひるめ」は「日の女神」,「靈」は巫女みこを意味するそうだ。祀る者(大日靈尊)が後に祀られる者(天照大神)に昇格したともされている。天照大神は太陽神であり、女神とされている。いうまでもないが、伊勢神宮の祭神であり、皇室の神でもある。

太陽神は、ヒンズー教でいうとスーリヤという神がそれにあたる。インド東部のオリッサ州コナラークに、世界遺産となっているスーリヤ寺院がある。スーリヤは、三つの目、四本の腕を持つ姿で表され、7頭立ての馬車に乗って天をかけるという。寺院全体を太陽神の馬車に見立てて建てられ、その馬車の車輪が寺院の基壇に彫刻されている。高さ3mの車輪が24配置

され、寺院全体に精巧な彫刻が施されている。

日本に仏教が伝来し、神仏習合が進むとインドの仏教、ヒンズー教の神々が日本に伝えられるようになる。インド西部のデカン高原には、アジャンターの石窟があり、そこに描かれた「蓮の花を持った観音菩薩」は、中国を経て、法隆寺の金堂に再現された。梵天、帝釈天、弁財天、大黒天、吉祥天等の天部は、もともとヒンズー教の神々で、仏法の守護神となったものである。

このように、インド仏教やヒンズー教の影響が日本まで及んでいることを考えれば、スーリヤ



スーリヤ寺院の車輪

ヤ寺院の車輪も関係がないとは言い切れない。

スーリヤ寺院の車輪の骨も車神社と同じ8本である。ただ、デザイン的にバランスがとりやすいためか、家紋の車紋でも8本が最も多いし、仏教のシンボルとなっている法輪も8本である。日本の仏教で用いられている法輪は、古代インドの王が持っていた車輪形の武器を指すといわれ、スーリア寺院の車輪が法輪ともいわれている。実に関係が深い。



法輪

るが、日本の仏教に取り入れられ、日天とされた。スーリアと日天の違いは、三つ目がなくなって、腕が2本になり、日天の方が人間の姿に近くなったといえるが、馬車で天をかけるのは同じである。そもそも馬車に乗るのは、この神をおいて他にはない。しかし、どちらの神も多くの信仰を集めることはできなかったという。そのため、あまり知られてい

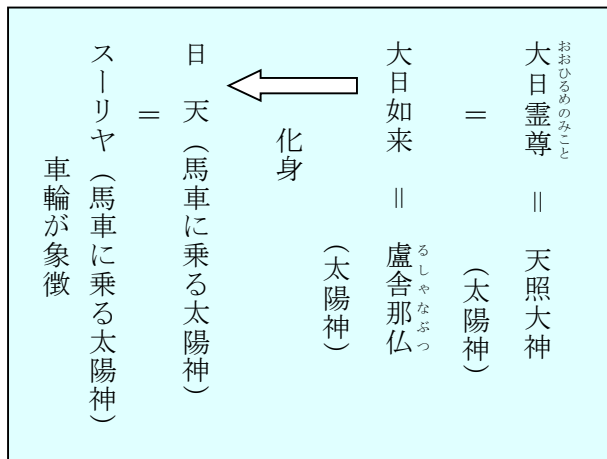
ない神となっている。

一方、大日如来は密教（日本では真言宗、天台宗）の最高仏と位置づけられ、盧遮那仏と同じとされている。密教では、如来も菩薩も大日如来の化身とされているので、日天も大日如来の化身となるわけである。また、盧舎那仏（大日如来）は、単に太陽神を指す場合もあるといい、日天（スーリヤ）に通じる。

日天 (広辞苑より)
日天子の略称で、太陽を神格化した神であり、太陽を宮殿とし、その中に住み、四洲を照らすという。帝釈の内臣または、観音・大日如来の化身の一つともいう。十二天の一人とされ、二臂像で八頭立ての馬車に乗るとされる。

それならば、大日如来 (= 大日靈尊 = 天照大神)

が姿を変えて日天となり、馬車で天を駆けめぐったと解釈できるのではないか。さらに、車神社は大日靈尊 (天照大神) を祭神としていたわけだから、その化身の日天 (スーリヤ) を象徴する車輪を社紋としても全く違和感はないことになる。まして、天正時代から別当 (神仏習合の時代に使われたことばで、寺が神社を管理することをいう) を務め、大きな祭礼をつかさどってきた富賀寺は、高野山真言宗に属する密教寺院である。



(4) 車輪は神仏習合の象徴

仏教の民間浸透に伴い、神と仏は本来同一であるとする神仏習合が広まったとされる。すでに8世紀から、神社の境内に神宮寺を建てたり、寺院の境内に守護神を鎮守として祭ったり、神前で読経することも行われたという。11世紀にかけて神仏習合はいっそう強まったとされ、明治の神仏分離まで続くのである。

車神社の創建は不明だが、棟札がある天正時代よりかなりさかのぼると思われる。車神社の祭礼をつかさどった富賀寺は、富岡の東隣の中宇利村にあり、大宝元年(701)に行基が小堂を建てたことに由来するとされている。古墳の分布から推測しても、中宇利より富岡の方が古くから多くの人が住んでいたと考えられ、神社も相応の時代から存在したに違いない。ただ、鎌倉時代に各国々の著名な神社を記載した「国内神名帳」に車神社の名称がないので、きちんとした社殿ができたのは鎌倉以後かもしれない。

前述した法輪は、仏教では釈迦の教えを車輪にたとえたものとされ、後に仏法の象徴として用いられるようになり、仏法そのものとされている。車神社の神宝(獅子、神鏡、鰐口)の一つに鰐口(永禄13年1570)がある。鰐口は仏堂に吊り下げられる仏具であるから、神宝になっていることで、車神社の神仏習合がはっきり分かる。

神仏習合の影響により、車神社は源氏車の車紋を太陽神の象徴としてだけでなく、法輪の意味を含めた社紋としたのではないかと推測する。

(5) 境内社から

車神社の境内社は5社ある。〈資料6〉 気になるのは今宮神社である。創建は、享保7年(1722)で、江戸時代中頃である。今宮は、「新しいお宮」「新たに設ける宮」という意味である。祭神は、源氏の祖とされる清和天皇である。清和天皇を祀る神社は、京都を除くと他にはないそうだ。(境内社は不明)それほど祀られることのない天皇を祭神とするのはなぜか。

源氏は真言宗と関わりが深い。清和源氏の祖である清和天皇は、後に出家して

真言宗の仏門に入っている。清和天皇が在位された9世紀後半は、密教の天台宗、真言宗が広まり、神仏習合がさらに深まった時代である。真言宗は皇族、貴族から帰依されることとなり、その興隆は三河にも及んだ。この頃にできた有力な真言宗の寺がいくつかあるし、後に源頼朝の帰依を受けたと伝えられる寺もある。当時の富賀寺は、旧八名郡の広範囲にわたる神社の別当を務める権力があつた。地位は神官よりも高く、神官は僧侶の支配を受けたとされている。このような背景を考えると、別当の富賀寺が車神社の祭神、社名、社紋を決めたのではないかと考えられる。境内社については、車神社として定着した後に、その裏づけのために腐心したのではないかと推測する。その一つが今宮神社で、真言宗を庇護した清和天皇を祀ることで源氏と関わらせようとしたのではないか。

もう一つは御鋏社である。創建は明和4年(1767)で、さらに後になってからである。祭神は天照大神となっているが、本来は伊勢神宮外宮の祭神、豊受大神である。内宮の天照大神の食物をつかさどることから農業の神とされ、富岡にふさわしい。伊勢神宮は源氏車と密接に関

〈資料6〉

境内名	祭神	創建
・今宮大明神社	清和天皇	1722年
・天王八王子社	8柱	1711年
・若宮大明神宮	不詳	1711年
・御鋏大明神社	天照大神	1767年
・巖島神社	いちきしまひめのみこと 市杵島姫命	不明

わる。外宮の神官を務めた榊原氏（佐藤氏）一族の家紋は、源氏車そのものである。太陽神の天照大神を合祀したことで、伊勢神宮と関わらせることができたといえるのではないか。

（6）車の意味から

語源由来辞典によれば、車とは軸を中心にして回るしくみの輪をいう。「くる」の語源は、ものが回転するさまを表す「くるくる」や目が回る意味の「くるめく」などの擬態語だそうだ。「ま」は、「わ（輪）」が転じたものであり、漢字の「車」は、車輪を軸で止めた二輪車を描いた象形文字であると書かれている。

これを村に当てはめれば、領主（氏神）の軸を中心として、骨にあたる村民（氏子）が力を合わせ、支え合って村（車輪）を守って（回して）いくということだろう。時の領主か有力者、あるいは富賀寺の別当が、村民の家内安全と村の繁栄を願って、車に託して車大明神と名づけたと考えることもできる。祭神は、もともと産土神（守り神）だったが、後に名のある神「大日靈尊」を勧請したのではないかと考えるのはどうだろうか。

4 推理のまとめ

（1）祭神のこと

富岡に人々が住み始め、農耕が始まると、豊作等を祈願する神事が始まった。古事記（712年）が書かれた奈良時代には神話も広まったが、富岡では産土神を祀っていた。仏教が広まり、富賀寺が創建されると、神様の降臨を願う社殿を建てる気運が高まっていった。それには祭神を勧請する必要がある。氏子総代、守人をはじめ村の有力者、神官が、産土神に神格を与えることを富賀寺の僧侶に依頼した。時の領主にも願い出て、許可を得た上で富賀寺を別当として、密教でいう「大日靈尊」（天照大神）を祭神とした。

伊勢神宮には、太陽を神格化した天照大神が祀られ、皇室の氏神ともなっているので、伊勢と関わりの深い神を迎えることができ、富岡の村人は大いに喜んだことだろう。

（2）神社名のこと

明治初めの古文書には、下宇利村で車大明神と言ってきたと書かれているが、その根拠は書かれていない。何らかの根拠やいわれもなしに、村人が車大明神と呼び始めるとは考えにくい。ここは、車の意味をよく知る富賀寺の僧侶が名づけたと考えるのが自然である。領主、村民と村の繁栄を、神仏の両方を取り入れた縁起のよい車輪に託す意味があったのではないかと。

神道でいえば、車輪は太陽神を意味する。祭神の「大日靈尊」は天照大神のことであり、太陽神である。太陽神のルーツは、馬車に乗るスーリヤ（日天）であり、車輪が象徴である。

仏教でいえば、車輪は法輪を意味し、仏法そのものであり、太陽神に通じる。「大日靈尊」は真言宗でいう真実の仏「大日如来」であり、馬車に乗る「日天」は化身である。

真言宗の富賀寺が別当のため、神仏両面から村民が納得できる、縁起のよい社名を考えたとするのが自然ではないかと思われる。それが、神仏共通の太陽神を象徴する車輪（法輪）を取り入れた「車大明神宮」ではないか。

（3）社紋のこと

祭神は、真言宗の教主である大日如来の神の名である大日靈尊となった。祭神が最高仏である以上、社紋もそれにふさわしいものにしなければならない。そこで、まさに仏法をあまねく転回することを意味する法輪と、太陽神をイメージする車輪を取り入れることにした。それが、祭神にも真言宗にもゆかりの源氏車である。真言宗の色彩が強いとはいえ、天照大神、太陽神とも関わり、神官、氏子も納得できるものである。

社紋がいつごろ作られたものか不明だが、車紋は伊勢神宮の外宮の神官を務める榊原氏（佐藤氏）一族の源氏車を使わせてもらうことにした。車大明神宮の神社名だけでなく、祭神が「大日靈尊」（天照大神）で共通点があり、事はスムーズに運んだことだろう。

車神社の社紋を源氏車の車紋にできたのは、富賀寺が別当だったことに関係する。源氏車は御所車を意味し、源氏出身の家が用いているわけではないが、前述のように真言宗と源氏との関わりは深い。清和天皇以来、皇族、貴族からの庇護を得て、真言宗は広まったからである。源氏を連想させる源氏車を使うことにした理由の一つかもしれない。

以上の推理が史実に近ければ、祭神、社名、社紋だけでなく、車神社そのものが神仏習合の象徴だったということになる。

6 おわりに

八名郡誌によれば、編集のために各神社を調査した時点で、江戸時代以前の古文書はほとんどなかったとある。多くの神社は由来がはっきりせず、創建についても古い棟札がなくなり、創建年代が分かる神社は一社もないと明記されている。村落の成立と共に、それぞれの神社に守護神・土産神^{うぶすながみ}を勧請^{かんじゅう}したものと考えられるが、当初の神社は寺院と異なり、簡素な造りだったとされる。村の神社に神官や守人^{もろうと}が常駐することもないため、きちんとした記録が保存されず、失われて分からなくなったということだろう。

車神社に関する古文書についていえば、監督する立場にあった富賀寺に保存されていたのではないと思われる。しかし、武田信玄の野田城攻めの際に火災で全焼したことや、明治初年の神仏分離令がきっかけとなった廃仏毀釈^{はいぶつきしゃく}に伴う一連の混乱で、残念ながら失われたのではないかと推測する。

結局、車神社の由来に関する確たる記録は存在せず、推理に頼らざるを得なかった。ただ、明治初年に富賀寺が書いた口上（資料5）は大きなヒントになった。祭神を大日靈命から日本武尊に変更したのは、まさに別当の富賀寺だったからである。祭神、神社名、社紋についても富賀寺が決めたと推理できる根拠となった。

しかし、明らかな証拠はないし、十分な検証や推理にはなっていないように思われる。ご高覧いただきご指導、ご批評いただければ幸いです。最後に、調査のために多くの方々にご協力をいただいたこと、深く感謝申し上げます。

（文責） 八名郷土史会 安形 茂樹 令和2年3月23日（修正）

<参考文献>

- ・八名郡誌 大正15年
- ・新城市誌 昭和55年
- ・豊橋市史 昭和48年
- ・車神社誌 昭58年 神社誌編集委員会
- ・豊橋市神社誌 昭44年 豊橋支部神社誌編纂委員会
- ・校区のあゆみ 植田 平成18年 豊橋市制100周年記念 植田校区総代会
- ・東三河ところどころ 昭13年 豊田珍彦著
- ・豊橋の民話 片身のスズキ 平18年
- ・車神社 会所当番8組 平14年 荻野貫治著
- ・インド神話 東京書籍
- ・日本生活文化史 河出書房新社
- ・日本の歴史 集英社
- * インターネットの活用
 - ・ウィキペディア、デジタル大辞泉はじめ多数のHPを閲覧、参考にした

<資料7>

天正11年(1583)の棟札

<表>

<裏>

